



朝、徒歩二分の所にある診療所に出勤途中、保育所に駆け上つていく竜也君に出会いました。「おはよう」と呼びかけると、「いつてきます」と大きな声が返ってきて、その後、「先生の家知つともん、あそこ」と得意げに私の家を指さしてニヤツ。

島民とふれあい

午前中のメーンは月に一回は風邪をひいたとやってくるトラばあちゃん。話を聞いても診察をしても、とても風邪とは思えないけれど、ひいていると主張するので困ってしまいます。今日も、薬を出ささないで押し問答になりましたが、結局はいつも通り寄り切りで私の負けで

役立っているという実感

した。

お昼になって外に出ると、い

つも診療所で大泣きする小太郎ちゃんが登場していました。トー

マスの機関車のおもちゃを持っていたので、今度来たときには泣かれないように、とちよっと

時間をかけてお付き合ひ。コンクリートの道でゴロゴロと遊びます。

平凡、でも新鮮

家に戻って自作のラーメンを食べている最中に玄関が開く音がしたので行ってみると、ピーマンが三個入った袋がポツンと置いてありました。あわてて外を見ると、ほとんど診療所には来たことがないシカバあさんの姿がちらつ。後ろ姿に向かい「ありがとう」と頭を下げました。

「あれっ、あの、町の病院でうつ病と診断されてきたはずなのに、おかしいなあ」と思っていたら、竜也君が私の横をすつと通りすぎて振り向きざまに「ただいま」。すかさず私は「おかえり」と答えます。

午後、島で最高齢のおじいさんと全盲のおばあさん夫婦が暮らしている家へ往診。「わしもばあさんも元気」というものの、おばあさんはこの前ベッドから落ちて腰を痛めてしまいいよつとしかめっ面。

こんな平凡な毎日が淡々と過ぎていくのですが、私はいつもとても新鮮な気持ちでいることができます。それは巡航船から島に降り立つて島の家々を眺める時にいつも感じる「自分は、きつとこの島の人たちの役に立っているのだ」ということです。



写真に写っている範囲内に500人すべてが住んでいて、診療所からどの家にも10分以内に行くことができる

鳥羽市立神島診療所

【私の勤務地】 神島は、三島由紀夫の小説「潮騒」の舞台として知られている小さな島。面積は自治医大の敷地の2倍ほどでしかない。本土からの船便は1日4往復のみ。人口はわずか500人、診療所は医師、看護師、事務員各1人の最少人数で運営している。

二人とも「都会にいた子供たちの世話にはなりたくなくて」「ずつと島におる」とのこと、

愛すべき五百人の人たちの人生の流れの中に身を置いて、こんな気持ちでいられる幸せな日々が続きます。

(次回予定は宮崎県)

困った困った。

往診帰りに、ひなたぼっこをしている三人のおばあさんに出会いました。場所はいつもの所で、座る順番もいつもと同じ。そしていつも同じような話をしながら、みんな穏やかな表情でニコニコあいさつをしてくれま

す。